

---

## 高野昌昭の「自然音演奏」と日本の音響効果技術史

---

金子智太郎(愛知県立芸術大学)

---

1980年代より音具を用いたパフォーマンス「音あそび」を行った高野昌昭(1927-2007年)の表現は、80年代に環境音楽として紹介され、現在も日本におけるサウンド・アートの先駆のひとつと考えられる。同様の芸術家のなかでも彼は、音楽や美術ではなく舞台音響効果を出自とするという個性がある。50年代より音響プランナーとして活動した高野は、舞台でのテーブ・レコーダーの利用を開拓した技術者の一人だった。彼が使った「自然音演奏」という言葉には彼の経歴が反映されている。自然を演奏するとは矛盾して聞こえるが、かつて音響効果技術者は「波かご」や「鳥笛」などの音具を用いて自然音をつくった。高野の代表的な自作音具《音のカーテン(ささやきの壁)》は、たくさんの常滑焼の小片を結んだ釣糸をカーテン状に並べ、揺れると小片どうしが当たる音を奏でる。彼はこれを白樺林の葉が風に吹かれる音をイメージして制作した。こうした高野の表現は音響効果技術からどのように生まれ、自立していったと考えられるのか。

本発表の目的は、日本の音響効果技術史をふまえて高野昌昭の自然音演奏を考察し、日本のサウンド・アート研究に貢献することである。中川克志と発表者による共同研究「日本におけるサウンド・アートの展開」などの先行研究は、音楽や美術からの展開に注目してきた傾向があった。音響効果はこれらの分野と比較して、現実音の再現や音による物語表現を追求してきた長い歴史がある。近年は音響効果に関して映画、アニメーション、ゲームなど、分野ごとの美学研究がさかんである。本発表は、これらの研究と将来結びつくことを期待しながら、分野に限定されない音響効果技術の横断的理解を試みようとする。主に参照するのは技術者によって一般向けに書かれた著作である。80年代以降の著作は、日本の音響効果技術の歴史や音具を用いた「生音」の技術を解説している。

本発表が特に考察したいのは、高野の演奏が自然音の直接的な再現から離れていった経緯である。彼は70年代に自然音の録音に時間を費やし、また水滴の音を聞くための装置《水琴竹》を考案した。しかし、後に制作された《音のカーテン》の音は風音そのものではないし、自然音演奏には明珍火箸やバラフォンなど、自然音と無関係の音具や楽器も使われた。発表者はこの展開を再現から音楽性に向かったとは解釈できないと考える。音響効果技術の解説書においては「音の演技」という考えかたや、「擬音」という言葉に対する批判など、現実音のたんなる再現ではない表現が語られる。こうした文脈をふまえて本発表は、高野の自然音演奏は現実の自然音と演奏される自然音の間に、意図的な距離を設けていると考える。そして、この距離は、彼が身体運動への関心を通じて育んだと推測される、音を発する前の状態を聞き手に想起させる表現のためではないかと主張したい。